

人間にとって宗教とは ― 北東アフリカからの問いかけ

第1部 基調講演：貧困・紛争状況のなかでの宗教のゆらぎ

エチオピア・青ナイルの修道院 ―風の中に神の声を聞く―

山形孝夫

〇はじめに

今日はエチオピアの宗教について、特に青ナイルの源流タナ湖のキリスト教修道院に焦点を絞って、話をさせていただきますが、恐らく学会の皆さまには多少偏りすぎて退屈かなと思われるので、ところどころにスライドを交えながらエチオピアの現在に尾を引く歴史的・文化的コンプレックスを中心に話をすすめてまいります。

そもそも、エチオピアのキリスト教修道院に、なぜ興味を持ったのかということから話さないといけないわけですが、私の場合、最初のきっかけは河合雅雄先生ということになるのです。

まだ若かった頃、砂漠の死者の国をテーマに、エジプトのコプト修道院の調査に私は首までどっぷりつかっていました。ナイル川を境界とした東と西の空間―生者のクニと死者のクニというコスモロジーのなかで、修道院が全てナイル川の西の砂漠に偏在しているということに、シンボリックな意味を感じまして、そのことを夢中になって調べておりました。その結果、修道院というのは〈生きている死者〉のクニであるという見方に私は傾いていきました。

生者のクニと死者のクニとを一体どのようにして分けるのかというと、エジプトを南北に分断して流れるナイル川で分けている。そのナイル川を東から西に渡ると、そこに砂漠という見える形で死者たちのクニがある。修道士たちは此の世との縁を断ちきったいわば living dead といった仕方です。そこに住みついて暮らしている。明るく陽気に暮らしている。そんな風にみえる。悲しみの異界には違いないが、その悲しみの底は明るく、そして

透明である。それはなぜか。

そういう問いに挑戦して、「砂漠の修道院」というフィールドノートを書きました。

そのノートに目を留められた河合先生や梅原猛先生から、一度京都に来て話しませんかとお誘いをいただき、ふらりと訪ねて話をさせていただいたのがきっかけでした。4,5時間油を絞られたあとで、河合先生が、あなたの研究はそのままそっくりエチオピアのゲラダヒヒの世界ですね、と言われたんです。ゲラダヒヒが断崖の上に追い詰められてそこに群れをつくって棲息している。それがまるで異界の修道士のようなのだそうです。私は驚いてとっさに「陽気に明るく暮らしているのですか」と、おたずねしました。すると先生はこんな風におっしゃられた。通常のサルなら、テリトリーを巡って激しく争い、自分たちのテリトリーをしっかりと確保して暮らしている。群れと群れとがすれ違えば闘う。ところがゲラダヒヒは闘うことをしない。すうっと何気ない風にすれ違っていく。それは修道士たちと似ていませんか、と言われた。ひどくびっくりしまして、それでエチオピアのゲラダヒヒをぜひ見たいと思ったのがきっかけですね。今なら、福井君が行ってるよと言われまして、エチオピアに出かけていったのがそもその始まりでした。

このようにして、福井さんを中心とする何人かの若手の研究者とアディスアベバでお会いしました。30年ぐらい前の話です。今は、皆さん教授になられましたが、重田さん、宮脇さん、松田凡さん、それから今日の発表者の栗本さんも、まだ大学院の学生が助手であったように記憶しています。

そこでみんなと一緒にわいわい酒を飲み、情報を頂戴し、議論し、一緒に旅に出たり、いろいろ教えていただいて、ついにゲラダヒヒとも遭遇しました。このようにして私のエチオピア調査は始まったのです。

□エチオピアの修道院

本題に入ります。今日の話は時間の関係でとくにタナ湖の修道院に絞りたいと思っているのですが、タナ湖に限らず、エチオピアの修道院は、ラリベラの山中のような、この世から切り離された断崖絶壁といった異界にあります。エジプトと較べるとまるで違う生態系であります。こうしたなかでエジプトの修道院とエチオピアの修道院では、礼拝所の構造が大きく違います。歴史的には、10数世紀にわたり同じコプト修道院として組織を一つにしてきました。それがなぜ違うのか。あるいはなぜ違ったのか。どのように違うのか。その違いを簡単に申しますと、エジプトの礼拝所は古代ローマの裁判所の法廷をモデルにしたいわゆるバシリカ様式の構造です。古代ローマの法廷は、正面の一段高いところに裁判官の席があり、それと相対して一段低いところに被告と一般傍聴人の席がある。この形式をモデルとしてキリスト教の教会は造られました。このような特徴をエジプトのコプト修道院は共有しています。

ところがエチオピアの教会は全く違います。外形も内部構造もまん丸か、五角形の円形プランなのです。なぜ円形なのかについて、建築学者の見解は、エチオピア人はもともと丸い家屋に住んでいたから教会も丸いんじゃないかということです。そこから先は、ひとりで考えるほかないので、そこを突っこんでいくと、なかなか面白い。というのは、そこには円形空間の形而上学というかひとつの哲学が潜んでいて、円の中心から天界に向かって突き抜けていく限りない螺旋形の目には見えない曲線が無数に想定されている。これは私にとって大きなテーマの一つになりました。

次に、エジプトの修道院では、少なくとも現状においては、女性と男性は全く切り離されています。つまりは女人禁制が厳守されている。ところが、エチオピアの場合はかならずしもそうではありません。微妙な仕方ですが混住・共生しています。歴史を遡ると、エジプトからローマへそして

ヨーロッパへ伝えられていく過程で、男女はしっかり切り離されてしまいます。しかし、もともとエジプトでは必ずしもそうではなかった。かすかながら共住の痕跡が残されています。文献にわずかながら記録されていて、男性と女性がひとつのコンパウンドとしての修道院に共住していた痕跡が確認される。それが、いつか引き離され、やがて共住形態は消滅し、ローマへ伝わっていったときには、男性と女性との共生・共住は完全に排除されてしまった。ところがエチオピアの場合、修道院をひとつのコンパウンドとしてとらえる観点の中で、共生の空間が今に生きています。

このようにみてきますと、少なくともヨーロッパやエジプトのキリスト教の修道院からは大きく離れた仕方で、エチオピアの修道院は存在している。それが原初の形であったかどうか。それはとにかく、稀有な形の修道院が現在のエチオピアには存在しています。なぜそのような形の修道院が今に残されてきたのか。それはすこぶる刺激的で、その知的解明は、謎解きのように面白い。とても一筋縄ではいきませんが、現在のキリスト教修道院の形成過程を歴史的にとらえるうえで、まことに貴重な世界遺産であると私は確信しています。このよう前置きで話をすすめさせていただきます。

□神話と伝承の建国物語 — ユダヤ教との絆

ご承知のように、エチオピアの歴史を古代にむかって遡りますと、メネリク1世のソロモン王朝に突き当たります。その都がアクスムであります。このアクスムを中心に正統ユダヤ教を自認する「ベータ・イスラエル」（イスラエルの家）が誕生し、その後のエチオピアの歴史に深い刻印をきざみつけていく。なぜ「イスラエルの家」なのか。話は紀元前10世紀の伝承に遡ります。

それはシバの女王がイスラエルのソロモン王を訪ね、身籠もって帰ってきたという口碑伝承で、このような伝承ならどこの国にもありそうですが、エチオピアではその子供がソロモン王朝の開祖となった。つまりシバの女王が古代イスラエルから引き継いだものはソロモン王の血筋だけではなく、ユダヤ教そのものであったのです。かくてエチオピア王朝はユダヤ教を国教として成立します。ここに第1の文化的コンプレックスがあります。

ところが紀元4世紀頃、ローマ帝国のキリスト



写真1 ウラ・キンダネメレット修道院

教国教化に対応してエチオピアはユダヤ教からキリスト教に改宗しますが、ユダヤ教的な伝統は、そのまま残します。結果として、モーセ十戒（タボット）とキリストの十字架が二つながら共存するエチオピア教とも言えるべき独特の宗教が現出し、それが現在に継承されているわけです。モーセ十戒と十字架、それらがふたつながら並んでいるキリスト教は、世界中どこにも存在しないと思います。

ところで、その最初のソロモン王朝が紀元12世紀に滅亡し、代わって成立したザグウェ王朝は、非ユダヤ主義を標榜して登場し、その結果、大量のユダヤ教徒が追放されていくことになります。いわゆるファラシヤとよばれるこの国独特のユダヤ難民のはじまりであります。これも、いかにも奇妙なコンプレックスです。しかもこのザグウェ王朝の都がラリベラで、その地に建造された教会は、大地を掘り下げ岩盤をえぐるようにして地底に建造されていて、まるでそれ自体が地下の要塞でもあるかのような建造物で、地上にはどこを探しても教会は存在しません。ただ、これらの地下聖堂はなぜか円形プランではなく、エジプトのバシリカ様式と同じ形式のものです。なぜ、地下10メートルから15メートルの地底に岩盤をうがって建造されたのか。これも謎です。これもまたコンプレックスのひとつに加えることができるでしょう。

□ゴンダール王朝時代のタナ湖の修道院

ザグウェ王朝の滅亡後、タナ湖に近いゴンダールに、第3番目の王朝が成立します。わたしの今日の話は主としてこの時代の修道院に焦点を絞る

ことにしたいと思っています。

まず、写真1のウラ・キンダネメレット修道院ですが、建造年は1682年と伝えられています。形は円形プランです。円形の断面をアイソメ図（図1）でみると、屋根は藁葺きで、中心部にタボット、つまりモーセの十戒の板が収められていて、そこに十字架もあります。その中心部を取り巻くように円形の回廊がめぐらされていて、修道士たちは朝ごとに、香をたき声明のように朗読しながら、回廊をぐるぐるぐるぐる回る。ゆるいテンポの足踏みダンスをしながら、繰り返し声明を朗読し、ゆっくり踊り続ける。いわゆる朝の勤行（ごんぎょう）で、それが3時間から、ときには5時間も続く。立ちこめる強い香煙のなかで、しだいに恍惚となったところで中心部のタボットと十字架の神聖空間が開扉され、修道士たちはミサに与る。つまり、キリストの血とからだを拝領する。これが儀礼のクライマックスであります。

図2の1は聖堂、2が食堂。3は宝物庫といえますか図書館です。4は倉庫。5はあちこちにありますが、これは修道士の庵で、ここに修道士た

図1 エチオピア、タナ湖の修道院
（ウラ・キンダネメレット修道院）

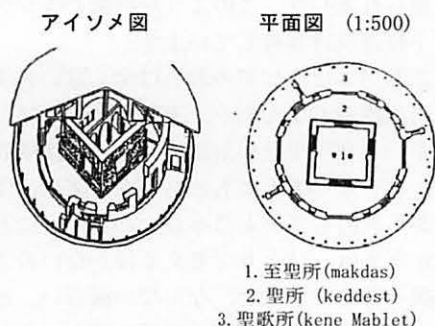


図2 修道院の配置図 (1:3200)

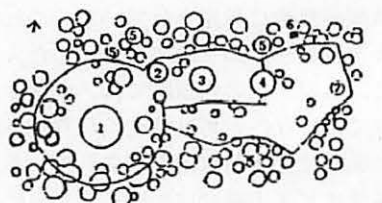




写真2 パピルスの船で移動する(タナ湖)

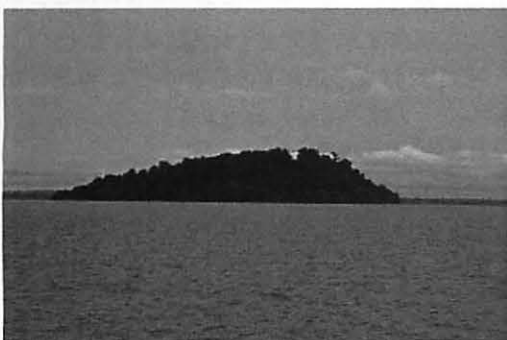


写真3 キンダネメレット修道院のある島

ちが暮らしています。修道士たちはここに30人ほど住んでいます。食事は食堂で食べる人もいれば、自分の庵で食べる人もいます。それは自由です。庵はばらばらにあって、一緒には住んでいません。共住ではありません。ラウラ(散住)といいますが、それぞれが庵を作って住んでいます。男性の庵も女性の庵もばらばらとあって、どれが男性かどれが女性のものかは分かりません。家畜小屋もあります。

タナ湖には無人の島が30以上あります。それらの島に10くらいの修道院があると言われてます。修道院といっても、庵だけのものもあるので、その数は正確には分かりません。修道士が勝手に庵を作って住んでいて、修道院の組織が、それらを管理しているというわけではありません。それぞれが庵を作って自由に住み着くところから始まり、やがて共同の礼拝所がつけられ、共同体としての形が整えられていくわけです。

タナ湖は、琵琶湖の10倍の面積で、交通は今でもパピルスで作った船を使っていて、あまり長く

乗っていると沈みます。荷物を降ろして島に引き揚げ、乾燥させて、また使います(写真2)。

次にキンダネメレットという修道院を紹介します。修道院のある島の中心の小高い山の上に屋根がちらっと見えます(写真3)。島の修道院の人たちが、栈橋に出て近づく船をみつめています(写真4)。

島全体を鬱蒼たる大木が覆い草が生い茂っています。まるでジャングルです。島全体が修道院なのです(写真5)。エジプトでは修道士たちは砂漠の中に城壁を築いて、その壁の内側に住んでいました。その点はヨーロッパの修道院と同じです。しかしここでは、周りが水ですから城壁を築く必要はありません。修道士たちはそれぞれの庵を森の中に作って住み着き、隠者のように暮らしています。そして、祈りをしたり儀礼をしたりするときに、島の中央の円形聖堂に集まってきます。わたしが訪問したときは太鼓を叩いて歓迎してくれました(写真6)。エジプトの修道院では太鼓は全く使わず、使うのはシンバルだけでした。なぜな

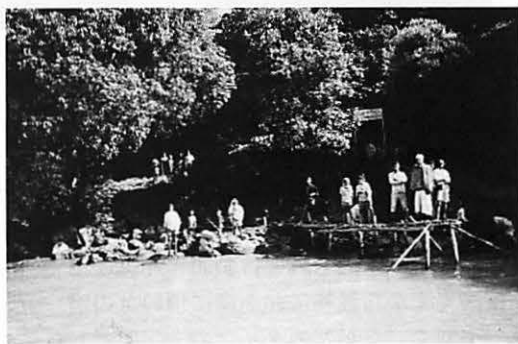


写真4 船をみつめる修道院の人たち



写真5 島全体が修道院



写真6 訪問客を太鼓を叩いて歓迎



写真7 槍のような十字架を持つ男性修道士



写真8 女子修道士が耕作しているコーヒー畑

のか。同じ組織であったのに奇妙です。

〈神の聖なる手—十字架〉

タナ湖の修道院の男性修道士が、手に槍のように大きな十字架を持っています(写真7)。十字架の形はローマのそれとはおおきく違います。河合雅雄先生から最初にお土産に頂いたのが、金属製で小型でしたがこのタイプの十字架でした。この十字架を使って病気治しでも悪魔払いでも何でもします。まるでモーセの神の聖なる杖であるかのように。

〈修道女〉

写真8の前方はコーヒー畑で、女性の修道士が耕作しています。農作業をしながら自給的生活をしているわけです。エチオピアのこの辺の習慣では、結婚した女性が40歳前に夫と死別すると、修道院に入るか、再婚するか、どちらかを選ばなければならない。40歳を過ぎてからでは選択肢はなくて、みんな修道院に入る。修道院に入って、病気の修道士のお世話をしたり、ミサ用のパン作りをしたり、自給自足のための農作業をしたり、と

いった奉仕をして、世俗的な生活の場からは隔離したところで余生を過ごしています。

〈ラリベラ山中の女子修道院〉

ラリベラの町の中心から遠く離れた山の奥に、かつて王族が住んでいた城砦があります(写真9)。現在は女性の修道院として使われているのですが、男性も住みついています。ここにも、共生の形態がみられます。

写真10は女子修道士がソルガムを収穫してふるいにかけているところです。

写真11は古い洞窟です。洞窟には骸骨があつて、そこがもともとの庵で、それがそっくりそのまま墓場になってしまったことを、写真は物語っています。現在は、すぐ近くに庵があります。

写真12は女子隠修者のひとりです。洞窟に庵を編んで一人住み着いて暮らしています。

〈女子修道士の庵〉

写真13は女子修道士たちの住んでる庵です。この隣に男性修道士の庵もあつて、その男性修道士が病気になる、女子修道士の一人が、自分が介護に当たっていると言っていました。



写真9 かつて王族が住んでいた山奥の城(現在女子修道院)



写真10 ソルガムをふるいにかけている女子修道士



写真 11 古い洞窟の墓場。もともと庵だった。



写真 12 独り洞窟に庵を編んで暮らす女性の隠修者

写真 14 は男性修道士です。修道士は大概、日本で言えば小僧さんのような子どもを連れていて、身の回りの世話をさせます。自分の親戚の中から賢そうな子供を選んで自分の後継者にするために文字を教え、14 歳から 15 歳になると、修道士になるための試験を受けさせます。合格すると、一人前の修道士として独立していくわけです。

写真 15 の左から 2 番目が女性の修道士です。修道院から時々自分の家族のところに戻ってくるそうです。これは、そのときの写真です。80 歳くらいの方でした。

〈聖水信仰〉

エチオピアの教会では、holy water による水の癒しが非常に流行っております。聖なる泉から水を分けてもらうために、朝 5 時ごろ、夜が明ける前に列を作って並び、プラスチック製の灯油タンクほどの大きさのペットボトルに水を分けてもらいます (写真 16)。

水を分けてもらうのとは別に、小さな小屋 (写真 17) で男も女も素っ裸になって、頭からホースで水をかけてもらいます。そうすると病気が治る。ですから、体調が悪い人はここに泊り込んで、水をかけてもらう。修道士が水かけの専門です。修道士はその水によって癒された経験を持っていたり、あるいは山のてっぺんで修行して天界から落ちてくる神の聖なる力を身につけているので、それをみんなに分けてやるというのです。聖水信仰による儀礼ですね。

写真 18 は、よろよろして歩けないようなおばあ



写真 13 女子修道士たちの庵



写真 14 見習の子どもをつれた男性修道士



写真 15 家族と一緒に女子修道士 (左から 2 番目)



写真16 聖水をもらうために早朝から並ぶ

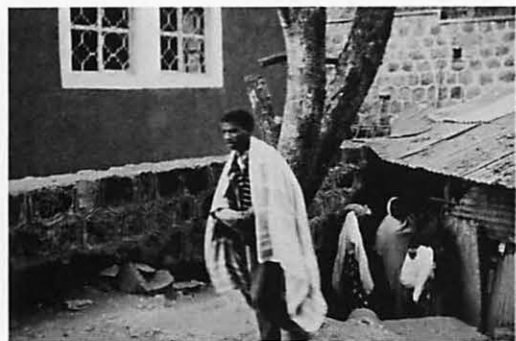


写真17 水をかける小屋



写真18 子どもたちに
身体を支えられて水
をかけてもらいに行
く老婆

ちゃんを子どもたちが抱えて、水をかけてもらいに行くところです。

写真19は、水をかけるための噴射装置です。井戸からくみ上げた水を、手押し装置でホースの先端からシャワーのように噴射します。

写真20は、気の触れた男を連れてきてみんなで押さえつけ、水をかけているところです。水をか

け終わって外に出てくるとけろっと治っているというんですが……。

〈キリスト教徒の墓地〉

話は変わりますが、写真21はアディスアベバ郊外のキリスト教会の墓地です。キリスト教徒はお墓を非常に大事にしている、立派な大理石の墓がたくさんあります。

葬式が終わった後、法事のような供養がありますが、まず、夜明け頃集まって墓にお参りをします。それから、ぞろぞろと列を作って死者の家に行き、そこでご馳走にあずかります(写真22, 23)。これに相当のお金をかける。そのための講のような組織もあります。

誰が来てもよく、親戚でない人たちもいっぱい集まってきて飲み食べます。

〈イスラームの樹木葬〉

一方、イスラーム教徒の墓地ですが、アディスアベバで墓穴掘りの人夫(写真24)についていって、どんな風に掘るのか、そのいちぶしじゅうを観察しました。

はじめ堅穴を掘り、次に横穴を掘り(写真25)、そこに頭をメッカに向けて遺体をおさめます。キ



写真19 水をかける噴射装置



写真20 気の触れた男に水をかける



写真 21 キリスト教徒の墓地



写真 22 葬式の後墓地に集まる人たち



写真 23 葬式の後会食に集まる人たち



写真 24 墓穴掘りの人夫



写真 25 横穴を掘る人夫

リスト教との違いは、墓標のように樹木を植えることです。樹木葬というところでしょうか。やがてその樹木がどんどん大きくなると、もう墓は消えてしまって、大きな樹木だけが残される。だから墓地は全体として深い森になっています。新しい墓は、まだ植えたばかりの若い木です。それが数年経ちますと大きくなり、30年でも40年経ちますと、深い森になっていきます。

写真 26 では、墓標の木が少し見えますが、もうほとんど周りの森に覆われてしまって、誰もお参



写真 26 30年から40年を経て森になった墓地



写真 27 キリスト教の隠修士

偉い修行者を頼ってその弟子になる、というような、要するに出家のように、家族との縁を突然断ち切って独りで山に籠る。山に入って、ヒンドゥー教徒のサードゥーのように岩の上に一晚中立ったままお祈りをする、といった荒修行をして、ある時ついに風の中に神の声を聞くという。隠修士の誕生です。女性もいます（写真12）。

一体その神の声とはどんな声なのか。私どもならずそう聞きたくなります。しかし、そのような人はこの国にはいなくて、誰もそういうことを疑問には思いません。

そのような人が、山に10年も20年も籠ったあと、里に下ってきて病気治しを行う。たいがい泉を探し当て、その水で病気を癒す。たちまちその隠修士のところに病人が集まり、そこに新しい教会が出来ていく。それがあちこちにあります。そこでは此の世と彼の世が接続している。それは夢の話というのではなく、夢の話こそが実は現実の話、という感覚であると思います。

□ファラーシャと呼ばれる人々

最後に、ファラーシャと呼ばれる人びとについて触れることにします。青ナイルを越えていくと、栗本さんの研究しているスーダン領に入ります。湾岸戦争の最中に、イスラエルがハルツームに難民救出のため赤十字の飛行機を差し向けた所です。

ゴンダールの、先ほど述べたタナ湖の周辺に住み着いているファラーシャと呼ばれるエチオピア人ユダヤ教徒は、数世紀にわたってキリスト教徒から差別されてきた人たちです。そのファラーシャをスーダン領まで手引きして、飛行機に乗せてイスラエルに運んだのです。それは1984年のモーセ・オペレーション、次のヨシュア・オペレーション、そしてソロモン・オペレーションへと続きます。その度にユダヤ教を信じているエチオピア人がパレスチナに向かってこの国を脱出しイスラエルに向かいました。その数は3万人を超すと言われています。その脱出行は、まるでモーゼの「出エジプト記」の物語風に人々によって語られています。

その人たちを追いかけて、イスラエルのガザ地区まで行ったことがあります。ガザには2万人くらいのエチオピアからの脱出者が兵舎のようなキャンプに収容され、イスラエル人からヘブライ語の教育を受けていました。

彼らがいかにエチオピアにおいてキリスト教徒から500年、600年と続く迫害を受け続けてきたか。それにもかかわらず、キリスト教に改宗することをせず、その苦難に耐えてきたか。そんな彼らが、ゴンダールから国境を目指してひたすら歩く。3カ月、4カ月と山中を、足を血だらけにして家族と共に彷徨しついに脱出に成功した。そういう物語を彼らは語ってくれました。それについては、『JANES ニュースレター』（No.3 1993年）で報告しましたので、省略しますが、ここにもエチオピア史のコンプレックスが、真っ赤な炎のように吹き出しています。

このような隠された歴史の断面を、短時間で話すことは絶望的なので、私の話はこのへんで終りにします。

（やまがた・たかお／宮城学院女子大学名誉教授）